

【講義概要】

行信教校の近隣には、多くの桜が植えられています。ある日、ちょうど周辺の桜が満開だったころ、行信教校を訪れた先生方は、学校に到着するなり、口々に今日の桜は見事だとほめ称えたそうです。

ところが、^{かけはしじつえん わじょう}梯 實圓和上は、満開の桜を愛でながらも、ぽつりと「仏さまがご覧になったらどうでしょう」と仰ったそうです。

三分咲き、五分咲き、七分咲き、満開へと、桜前線の通過に合わせて、桜の開花を楽しむのは日本人の風習であります。この人間の価値観、人のもの差し、尺度からすると、その日の桜ほどすばらしいものはありません。逆に花びらの散った後は、あつという間に桜の季節の終演を告げるようでもの悲しくもなります。

でも、これらは人間の都合で作りに上げた尺度で、^{ほんのう まなこ}優劣や善し悪しを判断し、人間中心に桜の価値を判断しているだけの話なのです。それは^{ほんのう}煩惱の眼によって、見ている世界でもあるのです。

^{かけはしじつえん わじょう}梯 實圓和上という元校長先生は、その世界を見ながらも、同時に、仏さまの眼からみた世界を想像しながら、「仏さまがご覧になったらどうでしょう」と仰ったのです。仏さまがご覧になったら、開花前の桜も、花が散った後の桜も、冬の枯れ木のような桜も、満開の桜と同じように光り輝いて見えるんじゃないでしょうか、という思いを口にされたのです。

この講義の「^{せいてん}聖典」は、そんな仏さまのお心が説かれた言葉を学びます。聖典には、「^{ふしぎ}不思議」「^{ふか}不可思議」という言葉がよく出てきます。これは、私たちの自己中心の価値観では思議できない、^{ほんのう}煩惱を中心としたもの差しで計り知ることができない仏さまのお言葉だからです。私たちの価値観では思議できない、仏さまの価値観、^{まなこ}仏さまの大悲の眼差しが記されているのが「^{せいてん}聖典」です。

この講義では「演習」というように、本来は自主的に調べて発表するスタイルをとりたいところですが、初めて仏教にふれる方も多く、まずは「^{せいてん}聖典」とは何か、また「^{せいてん}聖典」を拝読するとはどういうことかについて理解を深め、その後、『日常勤行聖典』の偈文など、普段つとめることの多い漢文の読み方について講義をしたいと思います。

損得・愛憎・善悪・^{せいてん}美醜……と、これらに執着しながら^と自分中心に^{みちしるべ}生きようとする私たち。これから学ぼうとする「^{せいてん}聖典」のお言葉が、私たちの称える念仏の声が道標となり、この無自覚に煩惱を燃やし続ける私たちの歩みを仏さまの世界へと転じて下さいます。一年間、その仏さまのお言葉を丁寧に紐解いていく練習をしましょう。

【テキスト】

『浄土真宗聖典』（註釈版）本願寺出版社

『浄土真宗聖典全書』第1巻（三経七祖篇）本願寺出版社

『浄土真宗聖典全書』第2巻（宗祖篇上）本願寺出版社

【参考文献】

講義中に随時紹介する。